

ペテロ第二1章19節 「さらに確かな預言」

1A 預言のみことば

1B キリストの力と来臨

2B 預言の確かさ

1C 誕生

2C 宣教

3C 十字架

4C 復活

2A 明けの明星

1B 夜明け

1C ヤコブの星

2C 義の太陽

2B 暗いところのともしび

1C 罪とつまずき

2C 昼の者

本文

ペテロの手紙第二 1 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回、先々週ですが、1 章の前半部分まで来ました。今日、午後に 1 章の後半を見ていきたいと思いますが、今朝は、その一部、19 節に注目します。「**また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。**」ここでペテロは、確かな預言のみことばと言っていません、「**さらに確かな預言のみことば**」と言っています。ここまでペテロが、確かだと言っていることに、今朝は注目したいと思います。

私たちが、日ごろの生活の中で信頼している情報は何でしょうか？いろいろな国で、その違いが浮き彫りにされて行きます。しばしば日本のメディアでは、アメリカという国が、未だに進化論を信ぜず、聖書を信じているというのは驚くべきことだと揶揄します。では、日本人たちはどうなのでしょう？自分の頭でしっかりと考えて、進化論が正しいと思っている人は、おそらくかなり少ないでしょう。おそらく、「教科書に書いてあるから」という程度です。つまり、教科書に書いていることは間違いのないと思っているのです。

クリスチャンの小説家、三浦綾子さんが戦時中、小学校の先生だった時に教えていた教科書を、敗戦後、子供たちに黒塗りをしなければいけなかったと話します。GHQ の検閲の命令が出たから

です。その時に、自分が教えていたことはいったい何だったのか？と思い、心がすさんでしまったことを述懐していますね。教科書がそんなに正しいのか？

高校生の時は、化学の先生が初めの授業で、開口一番、教科書の記述について「これ、間違えているかもしれないからね」と言ってくれました。科学に対して、絶えず、検証して、疑う姿勢を教えてくださいますね。けれども、それもよく考えずに科学を信じている。信じてしまったら、もはや科学ではないのです。

このように、人々は容易に、自分の信頼している源が、正しいかどうかを検証しないで、そのまま鵜呑みにします。そして、神のこと、キリストのこと、聖書に書かれていることは、初めから間違いだとします。そこまで否定するならば、では自分たちの信じているものは何なのか？と疑ってみないといけません。

1A 預言のみことば

ペテロが、この第二の手紙を書いている時に、すでに偽教師が出て来ていることを教えています。3章3-4節をご覧ください、「3:3-4 まず第一に、心得ておきなさい。終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」」主が再び来られることを、まるで空想話であるかのように嘲っています。ロトがソドムから救出される時もそうでしたね、彼は御使いたちから、ソドムに対する神の裁きを聞いて、急いで、すでに結婚している娘たちの家に行き、脱出を促しました。ところが、「彼の婿たちは、それは悪い冗談のように思われた。(創世 19:14)」とあります。世の楽しみに耽っていて、それで主が来られるのを嘲っているということが、教会の中にも忍び込んでいました。

1B キリストの力と来臨

それで、ペテロは、主が来られることについて、作り話ではないことを述べます。1章18節を見てください、「私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によったものではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。」キリストの威光について、自分は目撃者なのだと言っています。自分と、ヨハネとヤコブが、イエス様に連れられて高い山に登りましたね。「¹⁷ この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。¹⁸ 私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」ということで、ペテロこそがその目撃者なのです。そして、ただ一人ではなく、ヨハネもヤコブも目撃しており、証人が三人もいます。律法では、二人、三人の証人がいれば、事実と確認されることが書かれています。

2B 預言の確かさ

これほど確かなことはありません。けれども、ペテロは、「さらに確かな預言のみことば」と言っているのです。ところで、同じことをパウロが証言していました。パウロは、復活のイエスが彼に会ってくださいました。そのことを、エルサレムに旅に行った時に、ユダヤ人の前でも、またカイサリアでローマ総督に対しても、証言しました。しかし、彼は、預言者たちが預言をし、先祖たちが望んでいることを、望んでいると言っています。総督フェリクスに対して、こう言いました。「使徒 24:14 私は、律法にかなうことと、預言者たちの書に書かれていることを、すべて信じています。」アグリッパ王に対しても、こう言いました。「26:7-8 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか。」パウロは、聖書を信じていて、イエスの復活によって実現したことを、より確かなものとして宣べ伝えているのです。

実は、実は、主イエスご自身が、聖書の確かさを証しされていました。ご自身がユダヤ人たちから遣わされた者たちに捕えられる時に、ペテロが剣を出しました。けれども、さやに収めなさいと言われました。なぜか？「マタイ 26:53-54 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」そして、よみがえられた後に、エマオに向かって歩いている弟子たちに、こう言われました。「ルカ 24:25-27 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」

主が初めに来られたことについて、聖書に預言されていたのは、三百箇所以上と言われます。果たしてその通りかどうか、一人一人が調べてみるとよいのです。

1C 誕生

キリストが来られるのは、ベツレヘムからであると、ミカは預言しました。「ミカ 5:2 ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」彼が預言したのは、その誕生の 700 年以上前です。そしてその子は、処女から生まれるとイザヤが預言しました(7:14)。

2C 宣教

そしてキリストの宣教には、先駆者がいることをマラキが預言しました。「3:1 「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。」その通りに、バプテスマのヨハネが来まし

た。そしてキリストご自身は、ガリラヤからその宣教を始めます。「9:1 しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。」

そして、イエス様は、目の見えない人の目を開き、聞こえない人の耳を開きました。イザヤが預言した通りです、「29:18 その日、耳の聞こえない人が、書物のことばを聞き、目の見えない人の目が、暗黒と闇から物を見る。」

3C 十字架

主がエルサレムに入られる時に、ろばの子に乗られましたが、それもゼカリヤの預言の成就です(9:9)。そして共に銀貨 30 枚で裏切られることも、ゼカリヤは預言しました。「ゼカ 11:12-13 私は彼らに言った。「あなたがたの目にかなうなら、私に賃金を払え。もしそうでないなら、やめよ。」すると彼らは、私の賃金として銀三十シケルを量った。【主】は私に言われた。「それを陶器師に投げ与えよ。わたしが彼らに値積もりされた、尊い価を。」そこで私は銀三十を取り、それを【主】の宮の陶器師に投げ与えた。」

総督ピラトの前で、主は、数ある告発に対して弁明なさいませんでした。イザヤは預言しました、「53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」むち打ちにあうことも、預言しています。「53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」

十字架の上でのイエス様の様子は、詩篇 22 篇で克明に預言されています。主が、「神よ、なぜわたしをお見捨てになるのですか。」という言葉から始まります。祭司長らがあざける言葉、「22:7-8 私を見る者はみな私を嘲ります。口をとがらせ頭を振ります。「【主】に身を任せよ。助け出してもらえばよい。主に救い出してもらえ。彼のお気に入りなのだから。」」十字架の下で、ローマ兵たちがイエス様の着ていた物を、くじ引きをして分けました。ダビデはこう預言します。「22:18 彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。」主は「渴く」と言われましたが、22 篇 15 節には、「私の力は土器のかけらのように乾ききり舌は上あごに貼り付いています。」とあります。詩篇 31 篇 5 節には、「私の霊をあなたの御手にゆだねます。」とありますが、これが主の最後、息を引き取る時のお言葉でした。

主は罪のない方なのに、罪人に数えられました。そして、アリマタヤのヨセフの墓に葬られました。イザヤが預言しています、「53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが。」

4C 復活

そして、主がよみがえられました。これもまた、預言の成就です。「詩 16:10 あなたは私のたましいをよみに捨て置かずあなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならないからです。」

いかがでしょうか？今、見た預言は、主が初めに来られることについて、三百以上ある預言の中のごく一部です。どれだけ確かなものか、分かりますよね？だからこそ、使徒たちは、自分たちが復活のイエスを目撃したということ以外に、確証を、聖書の預言から抱いていたのです。

2A 明けの明星

それで、主は、ご自身がまた来ると言われていました。聖書の預言を見れば、主が栄光と力をもって来られることについての預言が、千数百とか言われます。もっと多いのではないかと思います。だからこそ、ペテロは、「主イエス・キリストの力と来臨」について、確かなものであると太鼓判を押しているのです。

1B 夜明け

そこでペテロは、次に、預言を心に留めて、希望を抱きなさいと励ましています。「夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」

夜が明けるとは、この世が暗くなっているが、光であるキリストによって世が滅んで、光が来る、神の国が来るという意味です。パウロが、ローマの人たちに書いています。「13:11-12 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いがもっと私たちに近づいているのですから。夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。」

1C ヤコブの星

主ご自身を、ペテロは、「明けの明星」と呼んでいます。バラムが、キリストの預言をしました。「ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一つの杖が起こり、(民数 24:17)」星が上がってきて、それが夜明けを生み出します。主ご自身が来られる前、夜はふけています。暗闇が覆っています。私たちが住んでいるこの世が、いかに暗いかを今、ここで説明するまでもありません。しかし、主が来られる日が近づくとつれ、薄暗くなってきて、日の出があるのです。

2C 義の太陽

そしてついに、日が昇る時には、すべてが明るくなります。神の国の到来です。主は、義の太陽として輝いておられます。「マラ 4:2 しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が

昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。」このようにして、太陽として輝き、私たちは癒しを受けます。

2B 暗いところのともしび

このようなところになるまでの間、「**暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。**」ということ。それまでの間、預言のことばはともしびとなります。

1C 罪とつまずき

ともしびは、私たちの前を照らします。「詩 119:105 **あなたのみことばは私の足のともしび私の道の光です。**」私たちが暗いところには、つまずきます。イエス様が言われました、「ヨハ 11:10 **しかし、夜歩けばつまずきます。その人のうちに光がないからです。**」私たちが、主の来られる約束、また、主が来られるために備えをする勧めがなければ、たちまちつまずいてしまいます。どこに行けばよいか、わかりません。しかし、みことばを取り上げるのです。希望のことば、預言のことばを取り上げるのです。

2C 昼の者

そして、夜の中にいながら、昼の者として歩むことができます。「I テサ 5:8-9 **しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。**」信仰と愛で胸当て、すなわち心が守られます。そして、救いの望み、あたまです。私たちの思いが守られるために、私たちは、救いの望みである、主の来臨を心に留めるのです。そして、つまずきから守られるのです。